

Ⅲ・『源氏物語』の概要

* ◇内の数字は資料番号

『女源氏教訓鑑』⁴¹は、近世後期以後に一般化した女訓書・実用百科書的な面も見られますが、書名からうかがわれますように、『源氏物語』を中心に据えた古典教養書的な性格が濃厚で、巻頭と巻末に概要的な内容の紹介を置き、さらに各巻の源氏物語香図引歌に加えて、巻名の由来、語釈、梗概、引歌の解釈などが詳細に解説されている本格的な入門書です。

『女要珠文庫』⁴²は、上段にやはり実用書的な知識を収め、下段に「湖月女文章」として、最初に「源氏香図」を示し、各巻の要所の説明文を仮名手本風の書体で記し、引歌を示し、作中人物の絵を添えたもので、これも優れた『源氏物語』の案内書と言えるでしょう。

『賢女遺訓操百人一首華文庫』⁴³は、百人一首の頭書の一面ごとに『源氏物語』の各巻を取り上げて、巻名・源氏香図・年立を示し、引歌を記した場面絵を掲げて、その解説を施したもので、『源氏物語』の内容を理解するための手引書として、なかなか充実しています。

『源氏百人一首』⁴⁴は、異種百人一首の一つで、詠歌が見られる『源氏物語』のほぼすべての作中人物一・二・三人について、一首ずつ歌を掲げ、詠まれた場面と人物の紹介をしたもので、弘徽殿太后のような歌を詠まない人物は若干抜けていますが、一種の作中人物事典といえます。

(東京学芸大学名誉教授 小町谷照彦)